

# 二人のヨーロッパ中世史家の思い出

## －柴田忠作先生と里見元一郎先生の研究を振り返って－

Memories of two Japanese historians for medieval Europa  
-Looking back on the research of Professor Shibata and Professor Satomi-

桑 野 聡\*

Satoshi KUWANO

In May 2019, Professor M. Satomi, who translated J. Huizinga's "The Autumn of the Middle Ages", passed away. In November of the same year, Professor T. Shibata, who translated "The Vision of Piers the Plowman," a valuable historical source of England's medieval history, passed away. They are my teachers for medieval European history. I am aware that they have formed an important part of my current research by learning how to approach cultural history, how to understand popular history, and how to learn different cultures. Here, I would like to review and organize the research achievements of the two people and confirm their role in the current history research.

### はじめに

還暦(60歳)も近づくと人生の新しい風景が見えてくる。ここ数年、自分の歩んできた道程を改めて考えさせられる計報を受け取ることが増えてきた。キャリア教育で用いられる「ライフキャリアの虹」にあるように、私たちの人生は年齢と共にその役割を変化させてきている。自分自身が社会の中で高い年齢層に近づくということは、私を導いてくれた人々は更に先のステージに進むことを意味している。恩師たちの計報は、私が次のステージに進むための最後の指導・鞭撻なのかもしれない。

2019年5月に中世フランス史の里見元一郎先生が、同年11月に中世イギリス史の柴田忠作先生が亡くなられた。お二人は、東海大学大学院において私をご指導いただいた恩師である。中世ドイツ史を研究する私にとって、専攻分野の直接の恩師はベルリン大学の故ベルンハルト・テップファー先生<sup>1</sup>と中央大学の故平城照介先生<sup>2</sup>だが、里見先生と柴田先生のお二人からは文化史や民衆史への取り組み方、異文化理解の学び方などを通じて、現在の研究姿勢の重要な部分を形成していただいたと自覚している。ここにお二人の研究業績を改めて振り返り整

---

※ 地域創成学科

理すると共に、現在の歴史学研究に繋がるその役割を確認する作業を行いたい。それは、単に出来ない教え子の思い出を綴ることに留まらない、20世紀後半以降の我が国の西洋史研究の動向を確認・整理する作業になると考える。

## 1 民衆史家 柴田忠作先生との思い出

### (1) 『農夫ピアースの夢』と民衆への視点

まず私の大学院の指導教授であった柴田忠作先生は、1928年に横浜に生まれ、東京大学文学部西洋史学科で山中謙二先生、堀米庸三先生に学び、東海大学文学部教授、同大学院教授を経て、東海大学名誉教授となり、2019年11月に90歳で逝去された。学部の卒業論文指導はドイツ近世史の寺崎章二先生<sup>3</sup>で、私が柴田先生にお世話になったのは大学院に進学してからになる。同期生は他大学から入学してきたビザンツ・十字軍史の都甲裕文(現東海大学非常勤講師)とドイツ現代史の澤田由利子(現桜美林大学非常勤講師)だったが、彼らと比べて私の歴史学研究に対する当時の思いは極めて脆弱だった。修士論文を書き上げた際も、柴田先生からは「なかなか頑張ったようですが、で、次は絵を描くのですか・・・」と皮肉を頂いた<sup>4</sup>。

その2月、歴史学との決別も考えて参加したベルリン・フンボルト大学への短期語学研修における故ウルズラ・ヴェルナー先生(2018年6月4日死去)との出会いが私を歴史学研究に踏みとどまらせたことになるのだが、帰国してオーバー・マスターとなった私を柴田先生は文明研究所の研修員として指導を続けて下さった。ここで私は大学院の後輩たちと柴田先生には内密で「S研」(柴田忠作研究会の隠語)という勉強会を立ち上げた。歴史研究者となるためにどうしたらいいのかを考えるため、まず柴田先生の取り組み方を知ろうと執筆された論文類を仲間と一緒に読み込んでいくという試みである。先生の若い頃の論文類を読み進む中で、柴田先生が「何故イングランドの宗教改革者ウィクリフに関心を持ち、その論文の中で何を追求しようとしたのか」などを自分なりに考えていると、そこには史料には登場しない名もない民衆の姿を求めているように思える時が何度かあった<sup>5</sup>。

柴田先生の研究業績の中で1981年に東海大学古典叢書として出版された14世紀後半に成立したウィリアム・ラングランドの『農夫ピアースの夢』の邦訳は特筆される<sup>6</sup>。先行の邦訳が二種類あるが、歴史学研究としての完成度の高さは群を抜いている<sup>7</sup>。綿密な訳者注釈と付論の「Piers the Plowman研究」(755～826頁)は、中世イギリス史だけでなく、後に社会史と呼ばれることとなる新しい歴史学の中で重要なテーマとなる民衆史・心性(マンタリティ)の研究にとっても大きな成果と言える。「S研」でこの準備のために書かれた諸論文を読んだことは、研究者が専門書を出すということの意義と苦勞と共に、構想を具体化させていくための作業イメージを知ることとなり、現在の自分のモデルを学ぶことになったと言える<sup>8</sup>。

またご自身は口にされなかったが、柴田先生は予備校の人気講師だったという<sup>9</sup>。先生の歴

史を現代の問題と連動させて考える姿勢は、この経験から始まっていたのかもしれない<sup>10</sup>。私は1989年秋からしばらくの間、複数の予備校で世界史の講師をすることとなったが、先生が設立に関わったと聞く駿優予備校が郡山に開校した際、週一で神奈川から出張することとなったのは不思議な縁である。更に長く柴田先生が担当されていた横浜市立大学の「ヨーロッパ中世史」の講義を1991年度から引き継がせて頂き、私は大学講師の経験を積ませて頂いた。

## (2) 『サガの社会史』と異文化世界への視点

柴田先生は1979年5月から一年余り、ラングランドとウィクリフ研究のためにオックスフォード大学や大英博物館をはじめとするイギリス各地をめぐり、バーミンガム大学のJ.シェパード教授やR.H.C.デーヴィス教授と親交を結ばれた。私が学部生時代にデーヴィス教授の『ノルマン人』が邦訳され、授業の課題図書として購入した<sup>11</sup>。北欧史研究は現在の日本では盛んな研究分野となっているが、当時はまだ十分な研究文献がなかったように記憶している。また更にこの著書はノルマン人、あるいはヴァイキングと呼ばれる人々の単なる概説ではなく、民族意識の形成と継承・終焉を考察の対象としている点で特異な存在である。私は学部の卒業論文執筆の際に「ドイツ人の民族意識と帰属意識の形成」に関心を抱き、これを修士論文でバイエルン部族の帰属意識と領邦国家の形成という問題に置き換え、更にヴェルフエンの家門意識と部族意識の考察に展開させたが、恥ずかしいことに学生時代にはこのデーヴィス教授の神話形成と民族意識の関係に関する研究を十分に理解できていなかった。近年は生物学的な人種・民族と歴史的形成物としての民族を区別して考えることが当たり前となっているが、デーヴィス教授の研究はこの先駆的試みだった。

私が博士課程に進む頃、柴田先生がカリフォルニア州立大学で学ぶ東海大学の卒業生から共同翻訳の依頼を受けたことを嬉しそうにお話になったことを覚えている。当時の東海大学には史学科とは別に北欧の言語・文化を学ぶ専攻があって後輩の院生にも北欧史を志す者が複数おり、東海大学出版会からは北欧神話や北欧関連の書物が既に多数出版されていた。またデンマークの教育者グルントヴィの教育理念と東海大学の建学の精神には親和性があり、当時はコペンハーゲンに東海大学のヨーロッパ学術センターが置かれていた<sup>12</sup>。しかし、上述のように当時この分野の歴史学的研究はまだ十分に紹介されておらず、このJ.T.バイヨック教授の『サガの社会史』の紹介は、我が国の北欧研究にとって文学・神話研究の成果を歴史学と結びつける上で大いに意義のあるものだったと言えよう<sup>13</sup>。それ故、更にバイヨック教授の『アイスランド・サガー血讐の記号論』が継続して邦訳されることとなったのである<sup>14</sup>。

1992年にアイスランドを訪問した際の話大学院の授業で伺い、かわいい大統領官邸の写真や豊かな温泉資源の話聞いたことが思い出される。先生は茶道と舞を嗜んでおられ、時折授業の際に抹茶をご馳走して下さることがあった。外国で茶道をさまざまな国の方々に如何

に伝えるかを興味深く伺ったことを覚えている。こうしてサガ史料の紹介や研究は先生の重要な活動分野のひとつとなったが、大陸とは異なるイギリスや北欧諸国への眼差しを間近で学んだことは、フランス北部～ドイツ西部を中心とした概説的なヨーロッパ理解に対する批判的な目を知らないうちに養うことになっていたのかもしれない。

### (3) 『景観の歴史学』と地域への視点

大学院生時代、柴田先生がドーバー海峡を越えてイギリスとフランスでは価値基準が逆転すると何度かお話になっていたのを思い出す。例えば、田園風景の中の樹木の枝ぶり、あるいは庭園の美に関して、イギリス人は自然のものそのままを好むが、フランス人は人間が手を加えて幾何学的な美を作り出す方を好むと話されていた。出版物として最後の仕事となったW. G.ホスキンスの『景観の歴史学』<sup>15</sup>は、柴田先生がご自身の研究生活と教育経験の中で「等身大の生身のイギリスを手のひらで実感する」ことのできる著作で、日本の研究者や学生に是非とも伝えなければならないと強く感じたものだった<sup>16</sup>。イングランドの古代から現代にいたる景観の変容を歴史的意義の考察を織り込みながら叙述するこの著作には、膨大で複雑な情報が詰め込まれているが、これを晩年の病と闘いながら先生は完成された。出版を目前にした頃に郡山に住む私に何度か電話が入り、欧米の大学図書館の文献検索を依頼された。既に綿密に作成されていた文献目録や訳注の最終確認をされたかったようだ。完成した本を送って頂いた際、「いろいろ作業をやっていただいて役に立ちました。感謝します。」の一文が添えられていたが、当時の私のIT能力はお粗末なもので十分な手助けにはならなかったに違いない。

この本の出版から間もなく、私は本務校の卒業研究でイギリスのカントリーハウスに取り組む学生を指導することとなったが、本書でテューダー朝期から近代へのイングランドの景観の変化に関する情報を得ることが出来たのは大変ありがたかった。

また最近では地域の歴史遺産の活用という課題が重要度を増しているが、この問題を考える際に、この『景観の歴史学』の視点は極めて有効である。数年前に授業で公園を考える必要に迫られた際も、個々の公園施設だけでなく、周辺地域の景観や歴史、生活共同体との関係などを視野に入れた考え方の必要性を強く感じたが、そのような指摘はすでにこの本の中に織り込まれていた<sup>17</sup>。私はベルリン留学の最後に都市シュヴェリンを例にドイツ語のレポートをテップファー先生に提出した際、法制史や経済史に依拠した従来の中世都市研究に加えて地理的環境の重要性を強く意識するようになったが、こうした関心の歴史学における必要性をこの『景観の歴史学』を読んでみると改めて確認できる<sup>18</sup>。

## 2 文化史家 里見元一郎先生との思い出

### (1) 宮廷研究と文化・文明への視点

里見元一郎先生は、1928年に静岡市に生まれ、東京大学文学部西洋史科を卒業後、1964年東海大学助教授となり、1967年から清泉女子大学助教授・教授を経て、1999年5月に清泉女子大学名誉教授となって2019年5月に亡くなられた。この間、東海大学文学部史学科西洋史専攻と大学院の非常勤講師としてお世話になった。

私が学生だった1980年代に里見先生が取り組んでいたのは宮廷研究だった。学部の授業では16世紀のフランス国王フランソワ1世の生涯を詳細にお話されていたことが手元に残るノートから思い出される。大学院に入って少人数のゼミで親しくお話をさせていただくようになった当初は、フランスとドイツの宮廷の機能と文化的役割についての論文をテキストとして講読した<sup>19</sup>。当時、宮廷研究はドイツで注目されるテーマとして日本にも紹介され始めていたが、法制史に基づく国制史研究や社会経済史研究と比べると、史料的にも方法論的にもまだ日本では難しいテーマだったと記憶している<sup>20</sup>。イタリア・フランスの西欧を先進地域としてドイツを後進地と捉えることを普通だと思っていた当時の私にとって、中世前期・盛期の宮廷文化が必ずしもフランス中心ではなく、ビザンツ経由の文化の伝播やオットー朝期の宮廷の先駆的な役割などを知り、多様な文化形成のプロセスと経路に興味を感じたことを覚えている。N.エリアスの『文明化の過程』や『宮廷社会』などを手にするようになったのもこの頃だった<sup>21</sup>。民族や国家、家門などの共同体への帰属意識を探りたいと思い始めていた当時、K.シュミートの家門形成論と出会うと同時に、貴族の歴史を単なる政治・軍事の事件史としてではなく、文化の問題として考える切っ掛けを里見先生から頂いたように思う。

### (2) ホイジンガとの出会いー文化史の探求

里見先生の研究において重要な位置を占めるのは、やはりオランダの歴史家ヨハン・ホイジンガの『中世の秋』の翻訳と関連研究である<sup>22</sup>。当時、同書には二つの翻訳があったが、中公文庫版の堀越孝一先生がホイジンガのブルゴーニュ公国の描写を通じて中世フランスの社会とヨーロッパの文化的特色を描こうとされたのに対して、里見先生の関心はホイジンガを介して「文化史」という歴史研究の方法論に向いていたように感じる<sup>23</sup>。堀越先生には1935年7月30日にホイジンガがブリュッセルで行った講演を基にした『朝の影のなかに』<sup>24</sup>の翻訳があるが、この「訳者あとがき」にある「近代ヨーロッパの思想のもっともよい部分、寛容の精神をホイジンガが体現している」という指摘には、堀越先生のヨーロッパに対するリスペクトを感じる。他方、里見先生には『文化史の課題』所収の諸論文<sup>25</sup>や『ホモ・ルーデンス』<sup>26</sup>の翻訳がある。2001年にそれまでの論稿をまとめた『ヨハン・ホイジンガーその歴史観と文明論』を送って



頂いたが、この「あとがき」に「ホイジンガの言わんとするところ、つまり「歴史を見る心」を汲み取って読んでいただければ幸いです。」と先生のホイジンガ研究の要点が簡潔に記されている<sup>27</sup>。

このホイジンガに向けられた歴史家としての目は、里見先生の恩師である兼岩正夫先生との間で育まれたものと推察する。里見先生の河出版『中世の秋』の翻訳は、兼岩正夫先生との共訳である。兼岩先生と里見先生の繋がりとは昭和21(1946)年の旧制静岡高校の西洋史の授業に遡ると、兼岩先生の没後に刊行された論文集の解説で里見先生ご自身が語っている。お二人は同郷の静岡県で、兼岩先生が1958年に東京教育大学で教鞭を執る前に出合い、その後に里見先生が東京大学で西洋史を学んだ後に共同研究者として中世ヨーロッパとホイジンガを探索し続けたのである<sup>28</sup>。お二人のこの縁を知らなかった私は、後に自分が兼岩先生の業績に大きな影響を受けてきたことに驚かされた。例えば、私が12世紀の中世ドイツを研究対象とするようになった一つの契機は、G.バラクラフの『転換期の歴史』を読んでフリードリヒ・バルバロッサの時代を面白いと思ったことにあったが、これが兼岩先生のお仕事だった<sup>29</sup>。

意外な繋がりには驚かされた経験としては、郡山女子大学で勤務するようになってから私の知らなかったホイジンガを教えてくれる本との出合いがあった。郡山市立美術館を立ち上げた村田哲朗先生が本学の教授として勤務するようになった折に、村田先生が出版社勤務時代に制作に携わった本としてホイジンガの画集を見せてくださった<sup>30</sup>。ホイジンガの祖国愛と中世観を感じることが出来る逸品で、この本の解説を里見先生は担当されていた。村田先生は「そうですか、それではこの本は桑野さんをお持ちの方がいいですね」と仰って画集を譲ってくださった。この話をお手紙で伝えた記憶があるのだが、その後直接お会いする機会を持てず、里見先生からこの本に関する詳しいお話を伺うことは出来なかったのが残念である。

### (3) アナール学派と社会史への視点

修士2年の1985年5月に大阪市立大学で開催された第35回日本西洋史学会は、「社会史」を考えるシンポジウムが目玉だった<sup>31</sup>。柴田三千雄先生の司会で中世・近世・近代を代表する3人の先生方が報告したが、私の記憶では中世の賤民・差別問題を検討するためには従来の経済格差や階級闘争などの視点だけでは不十分で、中世独特の世界観・宇宙観の理解が必要だという阿部謹也先生の報告が鮮明に脳裏に焼き付いている<sup>32</sup>。当時、アナール学派の研究とその社会史という方法論が歴史学界において大きな注目を集めていたが、当時はまだ実証史学として不明瞭なものとして社会史には批判的な目が向けられていた。

そんな中、里見先生は大学院の授業でアナール学派を代表する歴史家ル・ロワ・ラデュリの『モンタイユ』をテキストとして選び、「翻訳本を出したい」と仰って英語とフランス語を対比しながら文献講読を行ったことが思い出される<sup>33</sup>。私たちの力が及ばずこの計画は実現しな

かったが、ピレネー地方の農村の懺悔記録を読み込んでいく作業は初めての経験で、名もない人々の赤裸々な姿が新鮮な記憶として残っている。里見先生から文化史についての考え方を学ぶ中で、アナール学派やその社会史に具体的に踏み込んだコメントを聞いた記憶はないが、先生の研究の延長線上にこれらがあったことは、ホイジンガの文化史と社会史の間に接点があることを教えてくれる。

里見先生のアナール学派と社会史に対する考え方は、論文「新しい文化史論議を巡って」の中で明瞭に示されている<sup>34</sup>。私が大学院生として里見先生に教えを受けていた頃、上述のように日本の歴史学界では「構造主義とかアナール派歴史学が新しい歴史」として唱導され、それを取り入れようと努力している最中だったが、フランスの学会誌「アナール」自身が当時のアナールの歴史学を支えていた社会科学の危機を自覚し、様々な点で現段階の歴史研究を非難して見直しを求めていた。それまでのアナール学派を批判する立場は、メルヘン研究に新しい可能性を切り開いたR.ダーント<sup>35</sup>や文化人類学の方法論を援用するC.ギンズブルク<sup>36</sup>、アナールの心性(マンタリティ)の歴史を批判して「表象」(ルプレザンタシオン)を提唱するR.シャルチエ<sup>37</sup>などの試みとなって次の「社会史」を牽引し、現在に至っている。里見先生は、シャルチエの「表象」を18世紀の書籍の出版と読書の関係で実証した「文化の歴史学」に着目して、彼がその先駆的見本として提示したN.エリアスの社会文化史への回帰の理由を探り、そこにホイジンガの伝統的文化史との総合を見ている。この考察は秀逸である。里見先生は、表面的な社会史ブームを追うのではなく、ご自身が行き届いてきたホイジンガの文化史の課題を発展的に解決できる可能性のある方法論として社会史を位置づけたのである。

## おわりに

私の現在の研究領域・テーマは、12世紀のドイツ貴族ハインリヒ獅子公を中心に盛期中世の貴族家門の血統意識と共同体への帰属意識、その形成に不可分な領国政策(地域形成論)である。更に英独関係史、ヴェルフエンの都市政策を手掛かりとした中世都市研究、そしてメルヘン研究、東ドイツ研究などと気が付けば広範囲に及んでいる。しかし、郡山女子大学短期大学部文化学科および専攻科文化学専攻で多くの学生の卒業論文指導を担当する中で、自分では考えもしなかったテーマを扱う必要に再三直面してきた。その際、柴田忠作先生と里見元一郎先生をはじめとする諸先生方から学んだことに思いがけず助けられてきたことに気づかされた。自分自身が教える立場になってはじめて気づいた研究者としての基本姿勢や基礎力の大切さを実感している。大学生がヨーロッパ中世史を学ぶ際の教科書となるようなものにしようと声を掛けていただいた『15のテーマで学ぶ中世ヨーロッパ史』で「貴族身分と封建制」部分を担当した際、完成した本をお二人にもお送りした<sup>38</sup>。東日本大震災の直後でもあり、労いの言葉をいただいたが、柴田先生からの電話で「読んでもらえるものが書けたということは、いいこと

です。安心しました。」と言っていた。フランス語の『ラルース百科事典』全10巻を引き受けて欲しいと言われて受け取ったが、これが形見の品になってしまった。

また里見先生とは、フーコー研究者の中川久嗣（現東海大学教授）と共に「文化史とは何か」を教えていただきたいと無理を言い、正規の大学院の授業の後にもう1コマ特別授業をしていただいた。その延長線上で年に幾度か西大井のお宅を訪ねるようになり、次第に後輩の院生仲間と大人数で訪問して大酒を飲むようになった。奥様の手料理をご馳走になり、当時の我々には手が出るはずもなかったカルパドスの美味しさを教えていただいた。『ホモ・ルーデンス』を歪曲して「遊ぶ人」になろうと大騒ぎをしたが、先生と奥様は優しく見守ってくださった。ベルリンから戻った私が日本でも中世ドイツ史の先生の下できちんと学びたいと思った時に、中央大学の平城先生を紹介して下さったのも里見先生だった。それから8年に渡って平城先生のお世話になり、中央大学の大学院の授業ばかりかK. ボーゾルの翻訳勉強会のお手伝いをさせてもらい、研究者に育てていただいた<sup>39</sup>。現在、「ホモ・ルーデンス」は私が学生に贈るメッセージになっている。この文化の創造を「遊び」という視点で考えるホイジンガの発想は、恩師から受け継いだものであり、次の世代に伝えたい思いとなっている。

最後に、もう20年余り前のことになるが、高校時代から使い慣れていた世界史の資料集を見ていて驚いた。その資料集の執筆者代表は里見元一郎先生だった<sup>40</sup>。私は知らないうちに40年以上前から里見先生に教えていただいていたのだった。恐らく、私が「教師」を続けていく間は、これから何度も柴田先生や里見先生をはじめとする恩師たちの教えに助けられたと感じる経験をするのだろう。先生方の著作を読むたびに、新しい発見があるに違いない。私が少しでも成長している間は……。

<sup>1</sup> ベルンハルト・テップファー Bernhard Töpfer先生(1926～2012)は、ベルリン・フンボルト大学教授として多数の著作を残し、論文集等を編纂して東ドイツの中世史研究を牽引した。『民衆と教会-フランスの初期「神の平和」運動の時代における』（渡部治雄 訳創文社 1975年）は邦訳されている。著者は1988～89年にベルリン大学でテップファー先生の指導を受けると共に、東西ドイツ統一後の1993年にmit Evamaria Engel: *Vom staufischen Imperium zum Hausmachtkönigtum. Deutsche Geschichte vom Wormser Konkordat 1122 bis zur Doppelwahl von 1314*. Böhlau Nachfolger, Weimar 1976.の翻訳許可を頂き、詳細な修正の書き込みの入った著書を頂いたが、まだ完成をみていない。恥じ入るばかりである。

<sup>2</sup> 平城照介先生(1926～2009)の業績は、「平城照介教授略年譜および業績一覧」（『中央大学文学部紀要 文学部 編』163号1996年）179～182頁参照。

<sup>3</sup> 寺崎章二先生は、後に富山大学に移られたが体調を崩された。そして私が郡山女子大学に就職した後、入院先から突然ご自分が書かれたもの（寺崎章二『無精卵人間の時代』氷湖社 1979年、など）を送ってくださったが、直接お礼をすることも出来ないままに他界された。

<sup>4</sup> 修士論文「ヴェルフ家のバイエルン支配に関する試論一部族大公制から領域支配制への移行によせ



- て」の概要は、『東海大学大学院研究集報』第14号 1986年3月、10頁。
- 5 柴田忠作「ウィクリフの改革思想に関する若干の問題」(『東海史学』第8号 1971年)、同「ロラート運動について」(『東海大学紀要』文学部篇 第22号 1974年)、「同「ロラート派の12の主張について」(『東海大学紀要』文学部篇 第29号 1978年)、同「リチャード・ハン事件と1515年の政治危機について」(『文明研究所紀要』第5号 1985年)。
  - 6 W.ラングランド／柴田忠作 訳註『農夫ピアースの夢』東海大学出版会 1981年。
  - 7 生地竹郎のB・Cテキストを用いた二種類の邦訳本(『農夫ピアースの夢』篠崎書林 1969年、『ウィリアムの見た農夫ピアースの夢』篠崎書林 1974年)とAテキストの池上忠弘訳(『農夫ピアースの幻想』新泉社 1975年)がある。
  - 8 柴田忠作「14世紀イギリス民衆の生活意識について—Piers the Plowman をめぐって」(『東海史学』第11号 1976年)、同「Piers the Plowman :B-TextにおけるPardon Scene 解釈について」(『東海大学紀要』文学部篇 第26号 1976年)、同「Piers the Plowman の写本校訂をめぐる覚え書」(『東海大学紀要』文学部篇 第37号 1982年)
  - 9 予備校講師時代の評判は「柴田忠作は、元駿台予備学校世界史科講師。深い学識で大岡俊明師同様多くの生徒を魅了した。早口でエネルギー溢る授業。自分が話すことが重要事項と言い、雑談などは殆どせず年代なども繰り返し教えていた。歩く世界史辞典とも言われ知識量が尋常でなかった。」とある。「お茶のみwiki」(2020年10月6日閲覧) <https://pchira.wicurio.com/index.php> 著書は『世界史に強くなる本』(学燈社、1982年)。
  - 10 例えば、柴田忠作「スープラナショナリズム(Supra-nationalism)の可能性について」(『文明』20 1977年)参照。また『文明』第76号(東海大学文明研究所 1997年)で「民族意識の諸相」を企画・編集された。ここに筆者は図書紹介の小論を掲載している。桑野聡「ジャン・キューズニエ著、樋口淳・野村訓子・諸岡保江 訳『ヨーロッパの民族学』白水社〈文庫クセジュ〉1994年」63～71頁。
  - 11 R.H.C.デーヴィス／柴田忠作 訳『ノルマン人—その文明学的考察』刀水書房 1981年(原著1976年)。また山辺規子「〈紹介〉R.H.C.デーヴィス著 柴田忠作訳『ノルマン人—その文明学的考察』」(『史林』65巻第2号 1982年)320～322頁参照。
  - 12 例えば、東海大学附属中央図書館では1999年11月2日～30日の期間に「グルントヴィ展」を開催し、所蔵文献58点を展示した。この展示の解説には「グルントヴィは、敗戦による社会混乱で疲弊していたデンマークの復興をはかるため、民衆の言葉による生きた教育を実践し国民の精神育成をする『国民高等学校』の設立を提唱した人物である。その思想について、松前重義博士は内村鑑三先生を通じて多大な感銘を受け、教育の理想の姿を見出した。そして今日の東海大学の創立へとつながっていったのである。」と明記されている。<http://www.tsc.u-tokai.ac.jp/ctosho/lib/tenji/30th/30th-1.htm> (2020年10月13日閲覧)
  - 13 J.T.バイヨック／柴田忠作・井上智之 訳『サガの社会史—中世アイスランドの自由国家』東海大学出版会 1991年(原著1988年)。また有光秀行「〈新刊紹介〉J.L.バイヨック／柴田忠作・井上智之 共訳『サガの社会史—中世アイスランドの自由国家』東海大学出版会 1991/ 6刊」(『史学雑誌』100-11 1991年)参照。
  - 14 J.L.バイヨック／柴田忠作 訳『アイスランド・サガ—血讐の記号論』東海大学出版会 1997年(原著1982年)。

- 15 W.G.ホスキンス／柴田忠作 訳『景観の歴史学』東海大学出版会 2008年(原著1955年)。
- 16 引用部分は、同上、「訳者あとがき」348頁。
- 17 桑野聡「ヨーロッパの公園と地域共同体－「市民的公共性」成長のための一提言」(『郡山女子大学紀要』第54集 2018年)。
- 18 このレポートを邦語として発表したのが、桑野聡「ハインリヒ獅子公の都市シュヴェリン建設－12世紀の領国支配政策における都市の役割に関する一考察」(『比較都市史研究』第13号第1号 1994年)。また同「〈居住橋〉と中世都市の空間と機能－“Living Bridges”展に寄せて」(『比較都市史研究』第19巻第1号 2000年)、同「旧東ドイツ地域における中世都市の現在－2005年度ドイツ現地調査報告」(『郡山女子大学紀要』第44集 2009年)、同「旧東ドイツ地域におけるハンザ都市の現在－シュトラールズントの事例から」(『郡山女子大学紀要』第45集 2010年)などは、私が都市の環境、景観の問題に留意した研究と言える。
- 19 里見元一郎「宮廷文明の系譜－S.イェーガーの近著の紹介をかねて」(共編『西欧前近代の意識と行動』刀水書房 1986年)、同「宮廷文明の歴史的変容の軌跡」(『清泉女子大学キリスト教文化研究所年報』第2巻 1994年)、同「西欧ルネサンス」(『中世史講座 第10巻 中世の芸術と文学』学生社 1994年)。
- 20 例えば初期の研究動向を紹介したものとして、小倉欣一「ドイツ中世初期研究の新動向－Königspfalzenforschungについて」(『東洋大学経済経営論集』第45巻 1967年)参照。我が国における宮廷に着目した研究の進展を示すものとしては、高山博・池上俊一編『宮廷と広場』刀水書房 2002年、に所収の諸論文を参照。
- 21 N.エリアス／赤井慧爾・中村元保・吉田正勝・波田節夫・溝辺敬一・羽田洋・藤平浩之 訳『文明化の過程』上・下 法政大学出版局 1977・8年(原著1969年)、同／波田節夫・中埜芳之・吉田正勝 訳『宮廷社会』法政大学出版局 1981年(原著1975年)。
- 22 J.ホイジンガ／兼岩正夫・里見元一郎 訳『ホイジンガ選集 第6巻 中世の秋』河出書房新社 1972年(初訳1958年)。および里見元一郎「三つのホイジンガ論をめぐって」(『歴史学研究』第398号 1973年)、同「ヨハン・ホイジンガの歴史観の変遷とその背景」(『私学研修』59号 1973年)、同「ブルクハルトとホイジンガ」(『清泉女子大学紀要』22号 1974年)、同「ヨハン・ホイジンガの歴史観と文明論」(『文明』31号 1981年)、同「ヨハン・ホイジンガの生涯」(『清泉文苑』6号 1989年)、同「新しい文化史論議を巡って」(『清泉キリスト教文化研究所年報』1巻 1993年)、同「文化史の課題」(『清泉文苑』16号 1999年)、同「ヨハン・ホイジンガと遊びの精神」(『ヨハン・ホイジンガーその歴史観と文明論』近代文芸社 2001年)の8本の論文は、最後の書下ろし論文を収めて2001年秋に刊行された新書本の中に収められている。
- 23 J.ホイジンガ／堀越孝一 訳『中世の秋』上下巻 中央公論社 1976年。
- 24 J.ホイジンガ／堀越孝一 訳『朝の影のなかに』中公文庫 1975年(原著1935年)。この末尾に掲載の堀米庸三先生「解説」(214～222頁)は、スペインの思想家オルテガの『大衆の反逆』と共にホイジンガの講演をファシズムに対する優れた批判として評価しているが、私たちが20世紀の悲劇に学びながら近代市民社会の自由を守るために貴重な提言である。
- 25 J.ホイジンガ／里見元一郎 訳『文化史の課題』東海大学出版会 1978年(初版1965年)には、「文化史の課題」「歴史的な生活理想について」「前ゴシック精神の人」「ソールズベリーのジョン」「アベラール」「ルネサンスの問題」の6本の論文が収められている。

- 26 J.ホイジンガ／里見元一郎 訳『ホモ・ルーデンスー文化のもつ遊びの要素についてのある定義づけの試み』講談社学術文庫 2018年(初訳『ホイジンガ選集』第1巻 河出書房新社 1971年)。同書には、高橋英夫 訳『ホモ・ルーデンス』中公文庫 1963年がある。
- 27 註22、前掲『ヨハン・ホイジンガ』207頁。
- 28 兼岩正夫『ルネサンスとしての中世—ラテン中世の歴史と言語』筑摩書房 1992年、末尾に里見元一郎「解説—追悼をかねて」346～355頁。
- 29 G.バラクラフ／兼岩正夫・前川貞次郎 共訳『転換期の歴史』社会思想社 1964年(原著1955年)。
- 30 J.ホイジンガ／翻訳・解説 里見元一郎『ホイジンガ歴史画集 祖国の歴史より』河出書房新社 1972年。
- 31 「特別部会 「社会史」の現状と反省」(『第35回日本西洋史学会発表要旨』大阪市立大学 1985年) 70～74頁。日本西洋史学会公式ホームページ参照。 <http://www.seiyoushigakkai.org/houkokushu/file/35.pdf> (2020年10月13日閲覧)
- 32 阿部謹也『ヨーロッパ中世の宇宙観』講談社学術文庫 1991年、所収の諸論文参照。また阿部先生の賤民論については、本学専攻科1期生の研究指導の際に『刑吏の社会史』(中公新書 1978年)を例に共に学んだ記憶が鮮明に残っている。
- 33 邦訳は、E.ル・ロウ・ラデュリ／井上幸治・渡邊昌美・波木居純一 訳『モンタイユー—ピレネーの村 1294～1324』刀水書房 1990年(原著1975年)。
- 34 註22、前掲「新しい文化史論議を巡って」155～175頁。
- 35 R.ダートン／海保眞夫・鷺見洋一訳『猫の大虐殺』岩波書店 1986年(原著1984年)
- 36 C.ギンズブルク／杉山光信 訳『チーズとうじ虫——16世紀の一粉挽屋の世界像』みすず書房 1984年(原著1976年)など。
- 37 R.シャルチエ／二宮宏之 訳「表象としての社会」(J.ル・ゴフ・他／二宮宏之 編訳『歴史・文化・表象—アナール派と歴史人類学』岩波書店 1999年) 173～207頁など。
- 38 桑野聡「貴族身分と封建制」(堀越宏一・甚野尚志 編著『15のテーマで学ぶ中世ヨーロッパ史』ミネルヴァ書房 2013年) 105～122頁。
- 39 カール・ポズル／平城照介・他共訳『ヨーロッパ社会の成立』東洋書林 2001年。
- 40 里見元一郎(代表執筆)『精鋭 世界史史料』一橋出版 1978年。

追記：2020年8月28日に父、桑野昇が88歳で他界した。学問的な関係ではないが、本論で扱った恩師たちと共に私の研究を支えてくれた存在であり、ここに感謝の意を示したい。

加えて、拙稿で言及した註30の『ホイジンガ歴史画集』をお譲り頂いた村田哲朗先生が2020年12月末にお亡くなりになったとの訃報を受け取った。村田先生の公私に渡るご厚情に感謝申し上げると共に、ご冥福をお祈りしたい。

